

「自分」の内と外の関係性についての一考察

— その「他者性」を手がかりに —

高 木 綾

1. はじめに

「自分」とは一体何であろうか。これは、答えるのが最も難しい問いの一つではないだろうか。自分の身体、あるいは国籍、性別、様々な経歴や所属といった属性は、「自分」と深く結びついているが、「自分」そのものかと言われると決してそうは思えない。それでも私たちは、物心ついたときから「自分」であり続けてきたし、日々「自分」として生活している。「自分」というものは、確かに存在していることはこの私が一番よく知っているにも関わらず、それが何かと改めて考えてみても決して明確につかむことができない、といった逆説性をもつものであるように思われる。

本論では、「異質性」や「他者性」ということを手がかりに、「自分」¹⁾の内と外の関係性という観点から、「自分」というものに光を当ててみたい。明確につかむことは難しくとも、ある方向から光を当ててみることによって、そこには「自分」というものについての何らかの性質が浮かび上がってくるのではないだろうか。

2. 臨床心理学における「自分」の捉え方

「自分」については、これまで心理学、精神医学、哲学といった領域で様々に論じられてきた。中でも臨床心理学（あるいは精神医学、精

神分析学など近接の領域）においては、研究者ごとに実に多様な自己論が展開され、その定義も多様であるが、それは、こうした自己論の構築の主眼が、最終的には治療ということにあることと密接に関連すると思われる。治療論の根底には、必ずその研究者（治療者）自身が人間存在をどのように考えるかという人間観が存在し、「自分」ということをどのように捉えるかということは、この人間観と密接に結びついている。人間観というものが、研究者によって異なることにより、それと密接に関連する自己論も多岐にわたっているのだと言えよう。（例えば、Sullivan, H.S. や Rogers, C.R. などの自己論や、Erikson, E.H. の自己アイデンティティの理論などを見れば、それらが彼らの臨床の感覚に深く根ざしたものであり、治療論とその根底にある人間観がそこに深く関わっていることが了解されよう。）

更に、自己論と治療論が切っても切り離せないものであるということはまた、臨床心理学における「自分」というものの捉え方に一定の方向性を与えているように思われる。すなわち、臨床心理学においては、「自分」というものが、抽象的な理論として、あるいは静態的なものとして捉えられているのではなく、日々外界と関わりながら変化し発展している生身の人間存在に即した、より動的なものとして考えられていると言えるのではないだろうか。

このことを踏まえ、本論においても、生身

の人間に関わる心理臨床に携わる筆者の立場から、そうした生身の人間の持つリアリティを踏まえた、動的なものとしての「自分」について追ってみたい。

3. 「自分」を捉える様々な観点

「自分」とは、何か実体を持ったものではなく取り出して見ることのできないものである。この実体のない「自分」について考えようとするとき、これまでどのような観点からこの「自分」を捉えようとする試みがなされてきたのだろうか。

こうした時、「自分」そのものを捉えることはできなくても、それを「どのように捉えるか」という“視点”を取り出してみることはできる。心理学においては、このようにして、“見る自分”と“見られる自分”を分け、両者の関係について考える形で、これまで“自分”についての考察が深められてきたと言える。こうした関係は、心理臨床においては“語ること”や“言葉”といったことに如実に表れてくることとなる。例えば、大山(2003)の「かたる主体(sujet)」と「かたられる(言及される)主体(sujet)」の統合、あるいは伊藤(2001)の「言表内容(=対象)としての<私>」からの「言表行為者(=存在)である<私>」の疎外を伴う「発話者としての<私>」の生成についての考察があげられる。これらの論は、語る私と語られる私の二重性あるいは分裂が、人間存在としてのあり方と密接に結び付いているという視点に立つものと思われる。

一方、「自分でないもの」「他者」を対置することで「自分」を捉えようとするのも、「自分」についての考察には欠かせない観点であると言える。木村(1987)は「人は自分ひとりだけで『自己』であることはできない。自己が自己自身で

あるということは、さしあたって言うておけば、自己が他者との関係の中で自己自身となるということである(傍点著者)」とする。このことは、「個人が個人として、つまり自己が自己として自らを自覚しうるのは、自己が自己ならざるものに出会ったその時においてでなくてはならない。」「自己はあくまで、自己でないものに対しての自己である。」(木村, 1972)、「自己とか自分とかいわれるものの根拠が、というよりもむしろ、自己とか自分とかいわれることそれ自体が、私という個人の内部にはなくて、私と他人との、総じて人と人との『あいだ』にあるのだということ、このことは決して形而上学的な理論ではない。」(木村, 1977)といった表現においても明確に示されている。

この点についてももう少し詳しく見てみると、木村(1982a)は、「自己なるものとしての自己」あるいは「同一性としての自己」は「そのつどの自覚が絶えずそこに立ち戻る反復運動の収斂点としてのみ、しかもこの反復運動が有効に遂行される限りにおいてのみ、それ自身を保持することができるものである(傍点著者)」(木村, 1982a)とする。そして、「自己は自己ならざるものを抵抗として立てることによって自己自身に立ち戻る」(木村, 1982a)。自己がそのつどそこへ立ち戻る収斂点としての自己(「ノエマ的自己」)は、この反復的な復帰運動(「ノエシス的自己」)によってのみ確保され、その同一性と自己性を維持しうるが、逆に収斂点が与えられていなければ、この復帰運動は目標を見失ってしまう。つまり、「収斂点としての自己同一性とそこへの復帰運動とのあいだにはある種の弁証法的関係があって、両者のいずれの一方も、みずからの存立をみずからが可能にしているもう一方の側の成立に負っている。われわれがふつう自己と呼んでいるものは、このきわめて動的な弁証法的関係の全体をさしてのこ

と」(木村, 1982a)なのである。そして、この関係が成立するのは、自己自身の外部、自己と自己ならざるもの、他者との「あいだ」においてであるとする。

このように考えると、「自分」とは何か一個の実体ではなく、他者との「あいだ」に成立する動的な関係のことであり、「自分」が「自分」であることにおいて、「他者」は必要不可欠なものであると言えよう。「自分」と「他者」は、互いが互いを規定し合い、互いが互いの存在を可能にしていると言える。

4. 「自分」の中の異質さの諸相

「自分」と「他者」は、このように対置して考えられ、その存在が分かち難く結びついている。しかし、「自分」は「他者」の存在なしには存立し得ないとは言え、その自己の内部も決して一枚岩ではない。「自分」自体も多面的なものであり、様々な部分を合わせ持っている。更には、「自分」の中にありながら、「自分」とは思えないものや思いたくないものすら存在するのである。筆者はこれまで、こうした「自分」の中にありながら、自分のものとはなかなか思えないもの、あるいは思いたくないものを「異質な自分」と名付け、人はこうしたものをどのように自らの中に位置づけ、関わっているのかを探ってきた(例えば、高木, 2009)。その中では、例えば、「異質な自分」の一側面を、“本当の自分ではないように感じる自分”という形で表現し、“自分をそのように感じるのはどんな時で、それはどんな自分なのか”を被調査者にたずねる試みを行った。そうした問いに対し、ある被調査者は、「人前で自分の思ったことを言えない自分」と答え、また別の被調査者は、「本来やりたいことややるべきことができていない自分」と答えた。更に、「時に自分を衝動的に

攻撃してきたり支配しようとする“もう一人の自分”や、逆に「自分を励ましてくれたりする存在」がそれに当たると言う被調査者もいれば、「普段の自分なら出せないような力を発揮できたときに“別の自分”が後押ししてくれたと感じる」と言う被調査者もいた。こうした回答を全体として見ると、対人場面をはじめとする外界との関係の中で自分を「異質」と感じるというもの、外界とは一見無関係に、自分の中だけでそう感じるというものに大別でき、「異質な自分」にはその両方の側面があることがうかがわれた。そして、それとの関わりを考えた時、こうした「異質な自分」は「本当の自分」との間に様々な力動を生じさせ、その力動をどう生きるかということを通して、特に青年期において自己を形作るのに重要な役割を果たしていることが浮き彫りになってきた。

こうしてみると、「自分」の中にすら、自分の意思だけではなかなかコントロールできないものが存在し、しかもそれが「自分」に影響を及ぼし、「自分」の形成に重要な役割を果たしているのである。しかし、「異質な自分」(「自分」の中にありながら、「自分」とは思えないものや思いたくないもの)と感じられるものには、上であげたようなもの(被調査者の回答)以外にも様々なレベルのものがあると思われる。例えば、無意識の領域や、身体的なものがそれに含まれてくるのではないだろうか。

無意識は、「意識的でない、つまりはっきりそれと知覚されるような形では自我とつながりをもっていないあらゆる心的内容ないしは心的過程の総称」(Jung, 1921 / 1970)とされているように、自我によってははっきりと知覚できないからこそ無意識と呼ばれるのであって、それが自分の中にあることを(知識としてではなく)認識できていたらそれは無意識とは言わないだろう。しかし、「はっきり」知覚できて

いなくても、例えば「無意識的に～してしまう」といった表現で描写されるような行動、あるいはその他の様々な錯誤行為等の形をとって、日常生活の中に無意識が顔を出すことが起こり得ることは Freud, S. (1916 / 1977) も指摘するところである。無意識とはっきり認識せずとも、自分の心の働きの中に自分の意識ではわからないもの、自分の意志では統制することが難しいものがあること、そしてそれが自分の行動や、ひいては生き方にまで重大な影響を及ぼしていることを、人はどこかで感じ取りながら生きているのではないだろうか。そうした意味で、無意識もまた、自分の中の「異質なもの」として位置づけられ得るのではないだろうか。

また、次に身体について考えてみたい。これはまぎれもなくこの「自分」に属しているものである。改めて言うまでもないことであるが、身体がなければこの「自分」は存在しない。石福 (1977) は、「私たちがどんなに『高等』といわれる精神活動を展開する時も、身体が関与しない活動はあり得ない」とし、「私たちは徹頭徹尾身体なのであり、身体として考え、作り、文化を産み出している」とする。しかし、私たちは、ものを作ったり考えたり、あるいは手足を動かして (身体を) 移動したりすること、つまり行動のレベルにおいて身体を思い通りに動かすことができるが、自分の身体の全てを意のままに操ることができるわけではない。例えば、脳の働きや、内蔵の動きは、自分の意志で操ることはできないし、それを把握することすらできないことの方が多いだろう。これらは、意識よりは、むしろ無意識の領域とつながっているようにすら思われるほどである。例えば、アルバム写真等、何かの機会に撮影された自分の写真を見た時、よほど病的な状態に陥っている人でない限りそこに写っているのが自分であると認識できない人はいないだろう。しかし、自分

の脳の CT や、内蔵のレントゲン写真を見て、それが自分の脳や内蔵であると実感を持って認識できる人、感じられる人がどれほどいるだろうか。身体とは、まぎれもなくこの「自分」に属し、「自分」の存立に決定的な役割を果たしながらも、「自分」によって完全に認識しコントロールすることの難しいものである。一方で自由に動かすことができ、また一方ではその動きを把握することすら難しいといった逆説性を持った存在であるとも言える。その意味で、この身体も、「自分」でありながらどこか「異質な存在」と言えるのではないだろうか。

5. 「自分」の中の他者性

しかし、「異質さ」の程度というものを考えてみたとき、これまでの研究で筆者が考えてきた (あるいは調査において回答として得られた) 「異質な自分」は、あくまでも「自分の中にあるながら」という前提のもとで「異質」と感じられるものであったのに対して、ここで挙げた無意識についても身体についても、その「異質さ」の部分が、「自分」の一部として認識できる範囲を超えているように思われるのである。(このことは、これまでの調査が、あくまでもインタビューを中心にしたもので、被調査者の意識的な回答をもとに分析したものであったという点が大きいと思われる。)

例えば、Freud, S. (1916 / 1977) が錯誤行為の一つとして挙げている「言い間違い」や「もの忘れ」について、それを引き起こした当人の中の無意識の中の意向を指摘しても、その当人自身が容易に納得することのできない場合が多く存在する。これは無意識の働きであるが故にある意味当然のことと思われるが、こうした無意識による働きは、まぎれもなく自分の心の働きにより起こったということが素朴に了解され

る範囲のものではないと言える。また、身体に関しても、前述の脳のCTや内臓のレントゲン写真の例で考えると、それが自分のものであるということは、他者である医者からの指摘等、外から与えられた情報によって、つまり知的なレベルによってしかこれを知ることはできず、素朴に実感のレベルで“自分のものである”と感ずることは大抵の人にとってはまず不可能である。また、突然体のどこかに痛みが走った時、瞬間的にはこれをまぎれもなく自分の感覚として定位できるまでに時間がかかったり、あるいは突然病を宣告された時、これをすんなり自分のものとして認識し受け入れることが難しいということが起こる。それは、その人自身には、“体のこの部分のこういう状態がこうなったからここに痛みが走ったり病となったのだ”といった、痛みや病の生じた理由なり経路なりが日常の実感のレベルでは把握しきれていないからであり、その状態では、それは自分の身体の内部に起こったことでありながら、外から自分の意図に反していきなり“もたらされた”“もちこまれた”とすら感じられるのではないだろうか。

このように考えると、無意識や身体は、あくまで「自分」と考えられる範囲内の「異質さ」（「異質な自分」）というよりは、“「自分」とすら思えないもの”を含んでいるように思われる。こうした側面は、「他者性」とでも言えるようなものなのではないだろうか。「自分」の「異質性」が、「自分の中にありながら自分とは思えない、あるいは思いたくないといった性質や感覚」であるのに対し、「他者性」とは、“自分の中にありながら”という前提が成立し難いほどの“異質さ”を帯びていること”だと言える。

「自分」と「他者」は前述のように対置して考えられ、現実的・具体的な他者は「自分」の

外側にあるが、「他者性」は「自分」の内部にも存在しうると言えよう。

6. “内側の自分／外側の他者”という図式と身体との関連

このように考えたとき、私たちは、“内側の自分／外側の他者”という図式で自分と他者との関係を考えていることに気付かされる。その境界はあるいは明確ではないのかもしれないが、あくまでも「自分」は内側にあり、「他者」はその外側にあるという考えやイメージは誰もが自然に抱いているものではないだろうか。しかし、「他者性」が「自分」の内部にもあると考えたとき、この図式自体が果たして自明のものなのかという疑問が湧いてくる。

そもそも、「自分」は内側にあり「他者」は外側にあるという図式・イメージがごく自然に成立するのはなぜだろうか。それは、私たちが物質的な身体を持ち、物理的にも時間的にも有限な存在であるからではないだろうか。木村(1982b)は、「時間ということと自己ということが、本来切り離すことのできない一つの事態に属している」とし、それは人間が「有限の死すべき存在」であるということによると指摘している。また、特に物理的側面においては、私たちは物質としての身体を持ち、この身体は、まさに物理的に内と外の境界を持っているのである。皮膚の内側は、それをどう感じようと客観的・物理的には「自分」の身体であるし、皮膚一枚隔ててその外側は「自分」の身体ではない。更に、このように内と外の間にある一定の境界を持った物質的な存在であること、つまり物理的に有限な存在であるということが、いずれ老いて死する存在であるという時間的な有限性をももたらしており、このことは私たちの生にとって決定的な事実であるように思われるので

ある。

この様々な意味での有限性、特にその根幹であるところの、私たちが内と外との間に物理的な境界を有する身体を持っているという動かしようのない事実が、“内側の自分／外側の他者”という図式を私たちの中に成立させているのではないだろうか。²⁾

7. 様々なレベルにおける、「自分」の内と外との反転

しかし、上で述べたように、“内側”であるはずの「自分」の中にも「他者性」が生じうると考えた時、“内側の自分／外側の他者”という図式において、内側は常に内側でしかなく外側は外側でしかないといったように内と外が一面的、静態的な関係にあるわけではないように思われる。

このことは、無意識との関わりにおいて、よく表れてくると言える。例えば、Jung, C.G. の元型の一つである「影」という概念を考えてみたい。Jung (1959) によると、「影はその主体が自分自身について認めることを拒否しているが、それでも常に、直接または間接に自分の上に押し付けられてくるすべてのこと—たとえば、性格の劣等な傾向やその他の両立しがたい傾向—を人格化したものである」とされる。河合 (1967) も、この影の問題に関して、「今までそのひととしては否定的に見てきた生き方や考え方のなかに、肯定的なものを認め、それを意識の中に同化してゆく努力がなされなければならない」とする。こうした「影」は、しばしば外部の他者に投影される。つまり、他者の中にある、決して自分とは相容れないと思われるものや否定的に感じられているものが、実は自分と深い関わりを持っているということになる。自分にとっての外側は、単なる外側なので

はなく、実は内側（の投影されたもの）なのかもしれないのである。

こうした観点から、Freud (1919 / 2006) の「不気味なもの」についての考察は示唆に富むように思われる。Freud は、「不気味なもの」が、「知られておらず馴染みがない」ために人を驚愕させるのではなく、それは実は「何ら新しいものでも、疎遠なものでもなく、心の生活には古くから馴染みのものであり、それが抑圧のプロセスを通して心の生活から疎外されていたにすぎない」ものであり、そうした隠されていたものが不意に現れ出てくることによって不気味さを覚えるのだとしている。このように、自分とは疎遠と思っていたものが実は自分と深い関わりを持っている、あるいは外にあると思っていたものが実は内部にあるということが起こり得ると言える。

しかし、そもそも石福 (1977) が「私たちは徹頭徹尾身体なのである」とし、前述のように、身体が「自分」の存立を根本から支えていると考えられた事実からも、こうした内と外との反転ということが考えられるのである。野間 (2006) は、まさにこの「私たちが身体を生きている」ということに着目する視点から、身体を通じた対象との反転可能性こそ、「自分」の存立に重要な役割を果たしていることを指摘している。野間 (2006) は、「私」と「あなた」、「私」と「物」との反転可能な関係である「キアスム」³⁾ が私たちのあらゆる経験に存在するとして、これを心理学的、実存論的な視点から身体との関係で考察している。『「私」がどのような対象を認識し、どのような経験をする時でも、それは『私』との反転可能性によって成り立って』おり、「あらゆる経験において、『私』とは何なのかということがつねに問われ続けている」。しかし、こうした問いは普段は前面に出てくることはなく、それはすなわち「私」が身体と矛盾

することなく生きられていることを意味する。しかし、一旦「私」が自分の存在の意味について問い直すと、「ハイマート」⁴⁾という自己存在を保証してくれる対象の探求が中心テーマとなり、身体は「私」にとって居心地が悪くなり、意識されてくるという。更に、こうした「『私』と身体とのあいだのひずみ」が現れてきやすいのは青年期であること、心理学的レベルで見ると、こうしたキアスム構造は境界例の基本病理である「投影同一化」の中に明白に見て取れることを指摘する。「『あなた』のなかに『私』を見、『私』のなかに『あなた』を見る、二者のあいだの共鳴関係」である「投影同一化」は身体を介して機能しており、この心理機制自体は私たち皆が対人関係において持っていると言われる。こうしてみると、「自分」が「自分」であるということは、身体が関与した、「自分」と対象との反転可能性によって成り立っていることがうかがわれる。身体は、「自分」の内と外という図式の成立に決定的な役割を果たしているからこそ、その反転にも深く関連していると言えるのかもしれない。

しかし、身体を介した「自分」と対象の反転は、身近なところで、しかもこの「自分」を対象として生じている。その「対象」とは鏡像である。「自分」が鏡を覗き込むとき、こちらの「自分」は鏡に映ったもう一人の「自分」に覗き込まれる。石福（1977）は、この事態を「私はこちら側にいながら実は向こう側においてはじめて現存し、もう一人の私は向こう側ではなくこちら側においてはじめて現存を確認する。鏡はこのような私ともう一人の私のこの交互作用を否認なしに構成させる。」としている。また、鏡像と私との関係は「他者が私を見るようには決して見ることのできなかった自分の身体をいまや他者が見るのと同じように見ることができる」ことから「私が私に対して他者となること」を

意味し、「私の私自身に対する他者性を露顕させる」と指摘する。鏡を見ることで、私は物理的に他者の視点にたつことができる。鏡を見るという何気ない行為の中で、自己の位置（視点）と他者の位置（視点）を行き来して反転していくということが起こっているのである。

更に、女性が鏡の前で化粧をすることで「より満足度の高いもう一人の自分を作り出していく」という行為からわかるように、「鏡像は単に同一のものを生み出すにとどまらず、その中でこのこちら側の私をある方向に引っ張り、ある事柄を実現していくという力を持っている」ことを石福（1977）は指摘している。つまり、鏡像におけるこちらと向こうの反転は、自己を一定の方向に実現していくことにもつながっているのである。更に、鏡を普遍的に捉え直せば、私たちは「目に見えない鏡をたえず眼前に携えている」と言う。「私たちが日常行動する場合に私たちはもう一人の自分を頭の中に描いている。私たちが歩いたり走ったりすることは、この目に見えぬ自己像を絶えず我ものとしていく不断の実践なのである。」（石福、1977）。私たちが生きていくことは、「『ここ』から『そこ』へ、『私』から『もう一人の私』へ、いまの私の死から次の瞬間の新しい私の再生へ」という変換と循環なのである。今この瞬間に“ここ”にいる「自分」だけが自分なのではなく、その外側である“そこ”に自分を設定し、それと反転させていくことができるということが私たちの生を形作り、自分が自分であることを形作っていると言えるのではないだろうか。

このように見てくると、「自分」は心理学的にも、実存論的にも、あるいは他の様々なレベルにおいても、その内と外とがダイナミックに入れ替わりながら存在していると言える。「自分」は外側にもあり、内側にも「他者」がいるのであり、自分の内と外は、決して静態的に固

定された関係に留まっているわけではないことがわかれる。「自分」は内にあるというよりは、この内と外の動的な関係こそが、「自分」ということの本質に関わっているのではないだろうか。しかし、内と外の動的な関係や反転などと言っても、内と外が完全に一致したり、「自分」と「他者」が完全に合致することではない。そのような事態になれば、「自分」と「他者」の関係は混沌を極め、「自分」ということ自体が成り立たなくなる。このことは、先の「キアスム構造」における、「私」と対象との反転可能性があくまでも「『切迫』に留まる」(野間, 2006)とされていることからもうかがえる。このように考えたとき、「自分」ということの本質に関わる、内と外の動的関係において重要になってくるのは、その境界ではないだろうか。

8. 「自分」の内と外の関係性における、その境界の意義

—<異人>という概念をヒントに—

内と外の境界に関わる存在とそれに対するイメージは、“自己”や“自分”などといった観念が生じる以前から、古来人間存在にとって重要な役割を果たしてきた。その代表が、<異人>という表象である。赤坂(1992)によると、人間は自らの共同体とその外側との境界や、共同体の周縁部に<異人>⁵⁾表象を産出することによって、共同体としてのアイデンティティを保ってきたとされる。ここでは、この<異人>という社会学的な概念を参照しつつ、「自分」の内と外とその境界ということについて考えてみたい。<異人>という概念自体は社会学的なものであるが、後述するように、これは個人の内面の問題として考えられる側面も持つ(赤坂, 1992)。そうした意味でも、この<異人>概念を参照することは、「自分」の内と外とその境

界に関するイメージを豊かにしてくれるように思われるのである。

赤坂(1992)によると、「<異人>は内部と外部のはざま、それゆえ境界にたつ」とされる。社会集団はそれぞれ秩序を有し、その秩序の構成員は外集団に対して内集団を形成するのであるが、その構成員は「みずからの内集団への帰属を確認するために、すなわち社会的アイデンティティをいっそう堅固なものとするために、秩序の周縁部に、否定的アイデンティティを体現する他者を必要とする」。同様に「秩序が秩序として自己同一化をとげるためには、あるカテゴリー群を混沌として疎外すること、すなわち境界を設けることが不可欠の前提」であり、「秩序の内側にある者たちは、生き生きとした境界イメージをたえまなく生成・更新させるために、境界を含めた秩序の周縁部に、魔性の存在を招き寄せつづける必要がある」。つまり、<異人>は「内部の欠かしえぬ補完項(傍点著者)」として、共同体や秩序の側からの要請によって表象、産出されてきたのである。

ところが、こうした共同体あるいは社会のあり方として表れていた、内部/外部の分割とそこに生じる<異人>の物語は、世界の内部/外部というくっきりとした境界が次第に曖昧になり、また人格や自我といった観念が生まれてきた近代以降、個体内面的な葛藤として表れるようになったとされる。これを赤坂(1992)は、「<異界>の内面化」とし、「わたしたち近代以降を生きる人間は、だれしも内部に見知らぬ<異人>を棲まわせている、といってもよい。」と述べている。この内面化された<異界>とは、赤坂によれば無意識である。個人の外側にあった<異界>や<異人>が、無意識という形で個人の内側に発見される。つまり、個人の外側にあったはずのものが、内側に現れるという、内と外の交錯がここでも生じているのがわかる。

また、そもそも<異人>という表象自体が内と外の反転によって生成されていることが赤坂(1992)の指摘からうかがえる。「わたしたちはみずからの心的界域カテゴリーの外へ排除することを望んでいる諸要素、つまり否定的アイデンティティを、秩序の周縁部を彷徨する<異人>たちに投影し、仮託する。<異人>との遭遇とは、それゆえ、みずからが抑圧・排除したドッペルゲンガー(もうひとりの自己)との出会いでもある。」<異人>は共同体の周縁部に産出されたものでありながら、実は内部の投影されたものとして内部と密接に結びついているのであり、いわば「裏返された内部(傍点著者)」なのである。

こうした指摘をもとに、同様に内と外の間は何らかの境界が想定される「自分」というものについて、その境界のあり方を考えてみると、前述のような「自分」の内と外がダイナミックに入れ替わりながら存在しているという動的な関係は、内と外の境界が曖昧であることを意味しているわけではないと考えられる。時に曖昧になることがあるとしても、例えば常に自分と他人の区別がつかなくなるといったようなことは、特殊な場合を除いてはないからである。その境界は、曖昧というよりは、不断に更新され続けているものであり、固定的あるいは静態的には捉えられないものであると言った方が正しいのではないだろうか。これは決して目に見えるものではなく、勿論身体的な境界と一致するものでもないが、曖昧なのではなく、その都度むしろ明確に作り出されているものであり、だからこそ内と外のダイナミックな関係が可能になると言える。赤坂(1992)も、「わたしたちは不断に、内部／外部の境界を更新してゆかねばならない」「たえまない投射と摂り入れをつうじて、集団はそれぞれに、<常人>／<異人>という相補的イメージを小さな出会いの場面ごとに更新してゆくのである」と指摘する。し

かし、個人の内面の問題に置き換えた時、<異人>なるものは必ずしも外部にのみあるわけではない。前述のように、<異人>は、内部の投影されたもの、「否定的アイデンティティ」として外部に存在すると同時に、内部にも存在する。内面の<異人>とは、無意識といった内面の異界や、内なる「他者性」あるいは「異質性」と言える。そして、内なる<異人>と外なる<異人>は決して別個のものではなく、分かち難く結びついている。だとすれば、内なる<異人>との関わりは外なる<異人>との関わりにつながるものであり、内との関わり方は外との関わり方につながる。このように考えると、外なる<異人>との関わりだけでなく、内なる<異人>との関わりも、個人の内と外の境界を形作っていると考えられる。こうした個人の内との関係性、外との関係性がともに、内と外との境界を生成していくのではないだろうか。

共同体がみずからのアイデンティティを構築し、内と外との境界を設けるために<異人>表象の産出が必要であったことを考えると、「自分」というものについても、それが内と外との間に境界を持つものである限り、そこには常に「他者性」や「異質性」の問題がつきまとう。内と外との境界を不断に更新していく中で、「自分」であり続けるためには、私たちは常にその「他者性」や「異質性」と関わっていかねばならないと言えよう。そして、そうした「他者性」や「異質性」との関わりは、必ずしも外部との関係性なのではなく、私たちの内部との関係性でもあるのである。

このように見てみると、「自分」の内と外との境界は内と外を固定するのではなく、むしろ両者の反転や交錯といった動的な関係を可能にし、そうした内と外との動的な関係によって両者の境界が形作られ更新されていくといった、絶え間ない循環と生成の過程がうかがわれる。

「自分」とは、内と外をめぐる動的な過程そのものなのかもしれない。

9. おわりに

—心理臨床とのつながりを軸に—

本論では、特に無意識や身体といった次元に着目した「自分」の「異質性」や「他者性」というところから出発して、「自分」の内と外とその境界ということについてイメージされることを思い浮かぶままに述べてみた。「自分」の内と外は、スタティックに固定されているものではなく、内と外が様々なレベルで反転あるいは交錯しながら存在しており、その動的過程自体が「自分」という不可思議なもののあり方の本質に関わっているように思われた⁶⁾。そこに生じる「境界」も、“線”や“面”としてイメージされるようなものとは根本的に性質を異にしているのだろう（「境界」は内と外との関係性の中で成り立つものであり、「境界」のみを取り出して議論することは適切とは言えないが）。

「自分」の内と外は、これまで見てきたように、どちらが内でどちらが外かを固定できない動的なあり方を示しており、当初示唆したように内と外といった単純な構造で捉えること自体に一定の限界があるようにも思われる。特に、生身の人間に関わる心理臨床においては、こうした点についてより多面的な見方が必要になってくると言える。「自分」の内と外との反転や交錯は、心理臨床場面、特に「自分」について語るということにおいてどのように表れてくるだろうか。例えば、面接において母親が懸命に我が子のことを話す時、その母親は我が子のことを理解しようとしながら自分のことを理解しようとしているのであり、我が子のことを語ることで自分のことを語っていると言える。またクライアントが自身に対する不満を述べる時、それ

はセラピストに対する不満を述べているのかもしれない。こうした時、他者のことを語ることで自分のことを語る、あるいは自分のことを語ることで相手のことを語るということが起こり得るといふ視点がセラピストになれば、クライアントにとって面接の場は意味のあるものにはならないだろう。クライアントにとって、あるいはその語りの中で、自他は交錯しながら存在しているのであり、クライアントの「自分」というものに対する多面的で柔軟な見方が求められると言える。

「自分」と「他者」、内と外の動的な関係性を踏まえれば、他者との出会いは自分との出会いであり、自分との出会いは他者との出会いである。赤坂（1992）は、「あらゆる境界は、わたしたちの想像や夢の源泉であり、始源のイメージ群が湧きいづる場所である。」と述べる。「自分」と「他者」、内と外の境界も、私たちの個としての生の源泉と結びついているのかもしれない。

<注>

- 1) 「自己」という用語は、「自己意識」「自己像」「自己概念」といった、自己を客体化する過程やその姿を表現する用語に多く用いられ（溝上、2005）、自己の客体的側面を強く表している面がある。本論では、自己の客体的側面や、対象化されたものとしての自己というよりは、その人の中の“自分（私）である”という一人称的な感覚や意識を重視するために、「自己」ではなく「自分」という表現を主に用いることとする。
- 2) Laing（1971 / 1979）も、口の中の唾を飲み込むことは容易であるのに、一度吐き出した唾を飲むことは非常に不快に感じることを例に挙げ、「口の中の唾と、口から1インチ外にある同じ唾に違いのあること」を我々は知っており、「われわれは、自分自身を、皮膚の袋の内側にいると感じています。この袋の外にあるものは、非-われわれです。我-内側、非-我-外側なのです。（傍点著者）」と述べている。しかし一方で、恍惚を

感じている時や、投影や摂り入れ等の機制によって、この区分が失われ得ることも同時に指摘している。石福(1977)も、私たちが「徹頭徹尾身体」であることを指摘する一方で、「身体はただ皮膚の中に閉じ込められた、ある容積をもった生体というものではない」とし、幻影肢や道具の使用等の例から、身体が皮膚という境界から溢れ出て、様々なことを感じ取ったり体験したりしていることも指摘している。身体の内と外を区切る皮膚というのは、ある面では「自分」という存在についての一つの絶対的な境界ではあるものの、「自分」の内と外の境界と言うとき、それは必ずしも常にこの身体的・物理的境界と一致するものではないと言えよう。従って、本論で言う「自分」の内と外とは、必ずしも皮膚を挟んだ身体的な意味での内と外を指しているのではない。

- 3) 「キアスム (交叉配列)」とは、もとはメルロ＝ポンティによる概念。「私」と対象とは、鏡像関係のように、独立して存在しているわけではなく、両者の対関係がまず成り立っていて、そこからそれぞれの像が浮かび上がってくるという関係にあるとされる。両者は「肉」という同じエレメントでできているからこそ反転が可能であり、ともに世界に生起するという。しかし、自他の完全な重なり合いは不可能であり、「反転可能性」は常に「切迫」に留まることも指摘されている(野間, 2006)。
- 4) 「ハイマート (Heimat)」とは、「故郷、郷里、出生地、本国」あるいは「住居、我が家」などの意味をもつドイツ語。ここでは、「自らの起源や、最も安心できる場所や、自然な他者との情緒的交流」といった意味で用いられている(野間, 2006)。
- 5) 赤坂(1992)は<異人>を、①一時的に交渉をもつ漂泊民、②定住民でありつつ一時的に他集団を訪れる来訪者、③永続的な定着を志向する移住者、④秩序の周縁部に位置づけられたマージナル・マン、⑤外なる世界からの帰郷者、⑥境外の民としてのバルバロスに種別して定義している(傍点著者)。こうした表象は日本の民譚や伝承の中にも数多く見られることが指摘されている。
- 6) 一つ付け加えるならば、他者が「自己の最も内面的な部分、いわば自己の中心部に、自己存在

そのものの自己性を根本から疑問に付するような仕方で出現してくる」(木村, 1987) 統合失調症者においては、「自分」の内と外との反転や交錯といった以前に、「思考や意思が働いている『場所』としての自己」(木村, 1987) 自体が他性を帯びてしまうため、ここで述べているような「自分」の成立が根本的に障害されてしまっていると言える。

<付記>

本論は、高木(2009)(本文中でも言及)を執筆中に筆者の頭に浮かんだもののそこでは執筆にはいたらなかったいくつかの考えや、執筆後にいただいた意見などをもとに、一つの論考としてまとめたものである。ご意見を下さった方々に深く感謝いたします。

<文献>

- 赤坂憲雄(1992) 異人論序説 筑摩書房
- Freud, S. (1916) Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. 高橋義孝・下坂幸三訳(1977) 精神分析入門 新潮社
- Freud, S. (1921) Das Unheimliche. Imago Vol.5, No.5-6, 297-324. 須藤訓任・藤野寛訳(2006) 不気味なもの フロイト全集17 岩波書店, pp.1-52.
- 石福恒雄(1977) 身体現象学 金剛出版
- 伊藤良子(2001) 心理治療と転移—発話者としての<私>の生成の場 誠信書房
- Jung, C.G. (1921) Psychologische Typen. Rascher Verlag, Zürich. / In Jung, C.G. (1967) Gesammelte Werke 6. Rascher, Zürich. 高橋義孝訳(1970) 人間のタイプ ユング著作集1 日本教文社
- Jung, C.G. (1959) The Archetypes and the Collective Unconscious. Collected Works, 9, I.
- 河合隼雄(1967) ユング心理学入門 培風館
- 木村敏(1972) 人と人との間—精神病理学的日本論 躁鬱病と文化/ポスト・フェストゥム論 木村敏著作集第三卷(2001) 弘文堂, pp.165-319.
- 木村敏(1977) 「あいだ」と「ま」 躁鬱病と文化/ポスト・フェストゥム論 木村敏著作集第三卷(2001) 弘文堂, pp.357-371.

- 木村敏 (1982a) あいだと時間の病理としての分裂病
時間と他者／アンテ・フェストゥム論 木村敏
著作集第二巻 (2001) 弘文堂, pp.285-297.
- 木村敏 (1982b) 時間と自己 時間と他者／アンテ・
フェストゥム論 木村敏著作集第二巻, pp.129-
268.
- 木村敏 (1987) 自己の病理と「絶対の他」 時間と他
者／アンテ・フェストゥム論 木村敏著作集第
二巻 (2001) 弘文堂, pp.385-409.
- Laing (1971) *The Politics of the Family and Other
Essays*. Pantheon Books, New York. 阪本良男・
笠原嘉訳 (1979) 家族の政治学 みすず書房
- 溝上慎一 (2005) 形成としての青年期発達論—自己
形成とアイデンティティ形成との差異— 梶田
叡一編 自己意識研究の現在2 ナカニシヤ出
版, pp.9-34.
- 野間俊一 (2006) 身体の哲学—精神医学からのアプ
ローチ 講談社
- 大山泰宏 (2003) 語りの布置の中の主体形成 皇紀
夫編著 臨床教育学の生成 玉川大学出版部,
pp.82-100.
- 高木綾 (2009) 異質な自分との内的関わりについて
—青年期を軸に— 京都大学教育学研究科博士論
文

Abstract

A Reflection on the Relationship between the Inside and the Outside of Self: Considering the “Otherness” in Self

Aya TAKAGI

The purpose of this study is to consider the “alienness” and the “otherness” in “Self”, and the inside and outside of “Self”, and the boundary between them, by focusing on the unconsciousness and the body.

“Self” is not monolithic, but it contains something which one can not readily feel as one’s own or does not want to feel one’s own. The unconsciousness and the body, in particular, are felt alien to “Self”, and carry even the “otherness” as well, in that we can not control them completely. This indicates that the structure of “self inside/ others outside” is not always conclusive, or the inside and outside of “Self” are not fixed statically, but they exist changing places or intertwining at various levels. The inside and outside of “Self”, and the boundary between them, are considered being referred to the sociological concept of “stranger”. From the viewpoint of psychology, it is supposed that “stranger” exists not only outside of “Self”, but also inside of “Self”. This means that relation not only with the outside “stranger”, but also with the inner “stranger” forms the boundary between the inside and the outside of “Self”. That boundary continues to be updated (renewed) constantly, and we usually have to concern ourselves in the subject of the “alienness” and the “otherness” to be oneself. Then it is indicated that “Self” is a dynamic process itself over its inside and outside.

On the basis of this discussion, it is also pointed out that perceiving “Self” from the many-sided and flexible viewpoint is required in psychological clinic.

Key words : self, otherness, boundary